



JAAGAだより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町9番7号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

つばさ会 / JAAGA 令和7年度訪米成果報告 TSUBASA-KAI and JAAGA members participate in ASCC 2025

1 はじめに

丸茂 JAAGA 会長を団長とする令和7年度の JAAGA 訪米団は、9月18日(木)から26日(金)までの9日間にわたる米国訪問を実施した。今年度は、ピーターソン宇宙軍基地(コロラド・スプリングス)の宇宙統合軍(US Space Command)及び宇宙作戦コマンド(Space Operations Command)を訪問し司令官及び司令部スタッフを交えての意見交換、シュリーバー宇宙軍基地に所在する宇宙軍ミッションデルタ31及び郊外に位置するJCO(Joint Commercial Operations)セルの研修など宇宙軍に焦点を当てた部隊訪問であった。ワシントンDCでは米空軍・宇宙軍協会(AFA: Air and Space Force Association)が主催する航空宇宙サイバーカンファレンス2025(ASCC2025: Air, Space & Cyber Conference 2025)への参加、米空軍及び宇宙軍高官との意見交換、並びにJAAGA名誉会員等との交流行事などを実施し、JAAGA設立の目的でもある日米空軍種間の友好親善を促進することに寄与するとともに航空自衛隊に



とって関心の高い事項について最新の情報を入手することができた。令和7年度訪米団参加者は以下の9名。

- 団 長：丸茂吉成 JAAGA 会長
(三菱電機株式会社)
- 副団長：井筒俊司 JAAGA 顧問
(株式会社アストロスケール)
- 団 員：荒木文博 JAAGA 理事 (スカパー JSAT)
井上浩秀 JAAGA 理事 (株式会社 IHI)
上ノ谷寛 JAAGA 理事 (双日株式会社)
引田 淳 JAAGA 理事
(三菱商事株式会社)
- 西谷浩一 JAAGA 理事
(川崎重工業株式会社)
- 後藤雅人 JAAGA 理事
(三井物産エアロ株式会社)
- 鈴木康彦 JAAGA 理事
(三菱重工業株式会社)

2 コロラド・スプリングス

(1) 宇宙統合軍(USSPACECOM) 司令官との意見交換

ピーターソン宇宙軍基地に所在する司令部において、ホワイティ



～ だより 第69号 目次 ～

つばさ会 / JAAGA 令和7年度訪米成果報告	1	米空軍コーナー	27
日米等共同訓練 (RFA・CN・SF)	4	支部だより (三沢 AFB、横田 AFB)	29
令和7年度 JAAGA 横田基地研修	10	「JAAGA30周年行事ご案内」	30
横田基地研修所感	14	新人会員紹介	31
米空軍士官学校留学生支援「日光研修」	15	賛助会員の皆様へ	31
スペシャルオリンピックス支援	21	投稿募集のご案内	32
KPSO チャリティゴルフ	22	JAAGA グッズの紹介	32
米空軍将校航空自衛隊勤務だより	23	会員募集	32
航空自衛隊コーナー	25		

ング大將及び司令部スタッフと 90 分に亘り意見交換し、地域統合軍としての宇宙統合軍の役割や活動に加え、中国の宇宙能力の評価や航空自衛隊との連携など多岐にわたり議論することができた。特に、宇宙における軍民関係強化の重要性や国際関係構築努力など、今後進めていかねばならない分野や項目などについて情報共有することができた。



(2) 宇宙作戦コマンド (SPOC/ Space Operations Command) 司令官との意見交換

同じくピーターソン宇宙軍基地において、ミラー中將及び司令部スタッフと 1 時間以上の意見交換を実施し、SPOC の役割、特に宇宙統合軍との関係について理解を深めるとともに、フォース・プロバイダーとしてのレディネス向上施策や任務に適合した組織再編などを把握した。また、航空自衛隊宇宙作戦群との連携や防衛省との関係強化施策に関する双方の意見を開陳し、相互理解と認識の一致を確認した。



(3) ミッションデルタ 31 (Mission Delta 31) 研修

ミッションデルタ 31 は航法戦闘及び衛星制御ネットワークを担当している。



今回、シュリーバー宇宙軍基地に所在する隷下の第 2 航法戦中隊 (2nd Navigation Warfare SQ) を研修したが、同隊は GPS 衛星の管理、運用、維持を一元的に実施する部隊である。世界規模で GPS を指揮統制しており、全世界の官民ユーザーに 24 時間態勢で GPS 信号を提供している。作戦時はもちろんのこと、平素の経済活動や日常生活に欠かすことのできない GPS サービスを途切れなく提供してくれることに感謝を伝えた。

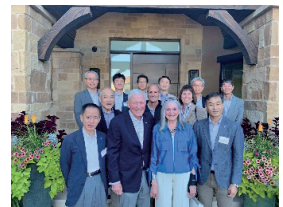
(4) JCO (Joint Commercial Operations) セル研修

JCO は、商用衛星センサーのデータやオープンソース・データなど秘区分のないデータを集約し、宇宙空間の衛星の動きや GPS の状況などを分析し共有している。具体的には、ロシアや中国の衛星の動きを監視し、不審な動きやパートナー国の衛星への接近をリアルタイムで把握して、必要に応じてアラートを発出する。また、ウクライナ周辺地域の GPS 信号の劣化などを検知し、PNT (Positioning, Navigation, Timing) マップを作成し、GPS 妨害の状況を可視化して地域軍や同盟国軍の作戦に寄与している。



(5) JAAGA 名誉会員エバハート退役大將夫妻との夕食会

JAAGA 黎明期を全面的に支援していただいたエバハート退役大將のご自宅を訪問し、感謝と近況を報告するとともに、ご夫妻から近傍のレストランでの懇親夕食会に招待いただいた。コロラド・スプリングスの新居はジャパニーズ・テイスト満載の作りが随所に見られるとともに、日本での思い出の品が至る所に飾られており、お二人の日本への思いが詰まった邸宅であった。



(6) 元第 5 空軍参謀長アイゼンハット退役大佐夫妻との夕食会



アイゼンハット退役大佐ご夫妻とは、現在も JAAGA 会員が出張の際などにお世話になり交流を続けているが、今回はご夫妻のご厚意により、ご自宅でのカジュアル・パーティーにお招きいただいた。郊外の高台に位置した邸宅は自然に囲まれた閑静な環境にあり、町が一望できるテラスやリビングで、様々な話に時間を忘れて盛り上がった。

3 ワシントン DC

(1) ASCC2025 への参加

① メインク空軍長官の基調講演

中国の発展速度に警戒感を示し、空においても



宇宙においても米軍の優位性が揺らいでいる今、必要なことは革新（innovation）であると宣言した。革新とは単に技術だけではなく、運用の方法、装備の維持・整備、訓練等全ての分野における革新を意味する。そして、指揮官から一兵士に至るまで、日々もっと良い方法はないか、革新を妨げているものは何か、と問い続けなければ成功はないことを強調した。そのうえで注目すべき3つの項目として、近代化（modernization）、レディネス（readiness）、人材（people）を挙げた。近代化では、F-35、F-15EX、F-47、B-21、CCA（Collaborative combat aircraft）、CJADC2（Combined Joint All Domain Command and Control）など新たなシステム導入による能力向上を図る。レディネスについては、特に装備品の可動率向上のための施策や資金投入の必要性を説明した。人材に関しては、行き届いた教育訓練に加え、生活環境や勤務環境の整備を推進することを説明した。そして最後に、成功のためには革新、革新、革新と繰り返し、講演を終了した。

② オールヴァイン空軍参謀総長の基調講演

冒頭、ミッドナイト・ハンマー作戦（イラン空爆）に関して、米空軍が本作戦にいかに関与し任務を達成したかについて触れた。そして、その直後



に実施され、米空軍が主導した大規模演習 REFORPAC（Resolute Force Pacific）について、参加人員や参加航空機の数だけでなく、その内容も驚異的であったことを説明した。演習では様々な検証や実験も行われたそうだが、指揮統制に大きな課題があることを明らかにしたほか、新たな情報技術プラットフォームや無人機対処装備品の試験的運用を成功させ、隊員の意識改革も含めて大きな収穫があったことも紹介された。そして、現在進めているCCAやB-21プログラムなどが順調に進んでいることと、このような装備品開発と密接に連携させてF-47プログラムを進めていることに触れて講演を締めくくった。

③ サルツマン宇宙軍作戦部長の基調講演

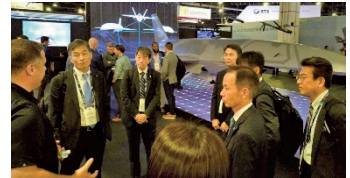
今年度は戦力提供（capability delivery）に焦点を当てた講演内容で、任務遂行に必要なシステムの調達や配備についての話題を現場兵士のビデオを用いて具体的に説明した。特に宇宙戦闘能力（space warfighting capability）の開発と提供は宇宙軍の中核たるものであ



り、提供の速度と効果を高める努力を続けるというものであった。また、任務に必要なシステム等の迅速な調達を可能にする仕組みや必要な予算措置などを紹介し、迅速で効果的な能力提供をさらに強化充実させていくことを約束した。そして、そのような能力提供のために統合ミッションデルタなどの組織再編や宇宙産業との関係再構築、調達担当人材の育成など今後の重要施策について説明し講演を終えた。

④ 展示会ブース見学

今年度は全員で主要な展示ブースを訪問し、担当者から説明を受け、意見交換や質疑応答などを行い、最



新システムの動向を把握した。自衛隊が既に導入を決めている装備品もあったが、将来の自衛隊運用への反映や米軍との相互運用性などを考えさせられる貴重な機会となった。

(2) 米軍高官との意見交換

① シュナイダー太平洋空軍司令官

シュナイダー司令官が主導したREFORPAC演習に関して改め



て教訓や課題などについて確認することができた。そして自衛隊との共同作戦や日本国内の施設共同利用などについての意見交換を実施し、方向性の一致を確認した。

② ゴッドフリー宇宙軍作戦部長補佐

宇宙における国際協力を担当する補佐官として、CSpO（「シースポ」Combined Space Operations Initiative：連合宇宙作戦イニシアチブ）やオリンピック・ディフェンダーなど自衛隊との連携についての展望や今後の方向性などについて意見交換を行った。ゴッドフリー中將は自衛隊への期待を強く持たれるとともに、日本の宇宙産業の可能性についても期待されており、官民合わせた国際協調を進めていくとのことであった。



③ シダリ宇宙軍作戦本部作戦次長（情報担当S2）

現在は宇宙軍の情報担当次長だが空軍でも情報将校としての勤務経験が豊富で、中国の宇宙作戦能力だけでなく、空軍の能力についても意見交換を実施することができた。台湾危機や



中露連携など最近のトピックなど、限られた時間でしたが情勢のアップデートができた。

(3) 在米日本国大使館訪問

国連総会のため大使不在であったが、島田次席公使への表敬を実施した。冒頭、次席公



使からは JAAGA の活動が日米安全保障に寄与していることへの感謝をいただいた。懇談では、米国内の安全保障意識や日本に対する信頼感の高まりなどについて話が及び、安倍政権時に日本の防衛戦略が大きく変わり、自衛隊と米軍が肩を並べて行動する素地が出来上がったとし、今後の自衛隊とともに JAAGA の活動にも期待をしたいと激励をいただいた。

(4) JAAGA 名誉会員との夕食会

今年もシュワルツ元空軍参謀総長宅で夕食会を実施していただき、昔話に加えて日本の政治情勢や防衛施策、米軍との演習、JAAGA 創設 30 周年などについて話は盛り上がった。また、夕食の席を借りてシュワーツ大将へ名誉会員委嘱も実施しました。来年以降はレイモンド退役大将が夕食会をホストするとの紹介があり、盛会のうちにお開きとなった。米側の参加者は、以下のとおり。



・シュワーツ退役大将（元空軍参謀長）夫妻

- ・マイヤーズ退役大将（元統合参謀本部議長）夫妻
- ・カーライル退役大将（元航空戦闘コマンド司令官）
- ・ドーラン退役中將（元統合参謀本部第 3 部長）
- ・フィールド退役中將（AFA 会長、元空軍参謀本部参謀次長）夫妻
- ・ノース退役大将（元太平洋空軍司令官）
- ・レイモンド退役大将（前宇宙作戦部長）夫妻
- ・ブラウン退役大将（元統合参謀本部議長）夫妻
- ・シュナイダー大将（太平洋空軍司令官）
- ・クラム退役中將（元 11 空軍司令官）
- ・コシンスキー中將（元統合参謀本部第 4 部長）

4 おわりに

今回の JAAGA だよりでは訪米概要についてお伝えしましたが、訪米成果につきましては令和 8 年 2 月に実施する報告会においてあらためてご報告いたしますので、奮ってご参加いただきますようお願い申し上げます。最後に、今回の訪米も多くのの方々のご協力により成果あるものとすることができました。この場を借りて以下に記載する皆様方に改めて御礼申し上げます。

- ・航空幕僚監部 総務課、防衛課、運用支援課、情報課
- ・米国防衛駐在官 中里 1 佐、江口 2 佐、井上 2 佐（前防駐官）
- ・USSPACECOM 連絡官 早川 1 佐、阿式 1 佐（前連絡官）
- ・米空軍士官学校交換幹部 根本 2 佐
- ・訪米団員所属企業の皆様
- ・全日空株式会社の皆様
- ・JAAGA 名誉会員及びジーン・アイゼンハット退役大佐
- ・つばさ会及び JAAGA 会員の皆様

（引田理事記）

日米等共同訓練（RFA・CN・SF）

Joint training with foreign countries “Red Flag-Alaska” “Cope North” “Silver Flag”

レッドフラッグアラスカ25-2参加に際しての所感

航空総隊訓練参加部隊指揮官 第9航空団飛行群司令 1等空佐 高倉 征宏

日頃より航空自衛隊の各種活動へのご理解、そして米軍との空軍種間における交流に多大なるご支援を賜り感謝申し上げます。今年度の米空軍演習レッドフラッグアラスカ 25-2（以下「RFA25-2」

とします。）への参加に際しても、約 1 ヶ月間本邦を離れて訓練に臨む隊員に対して温かい激励の品を賜り、ありがとうございました。

米空軍演習への空自の参加は、演習名が「コー

プサンダー」であった平成8年から数えて今回で26回目となりますが、同じく平成8年に設立されたJAAGAと同様に、日米空軍種間の様々な分野における理解の促進にも寄与してきたものと思います。

今回のRFA25-2へは、部隊の戦術技量及び米軍との相互運用性の向上を図り、日米同盟による抑止力及び対処力を強化することを目的に、航空自衛隊からはF-15×6機、E-767×1機、C-130H×2機と人員約270名がアイルソン空軍基地とエレメンドルフ統合基地に分かれ、展開撤収期間を含めて5月末から7月頭までの約1ヶ月間展開し、九州の面積を上回る広大な訓練空域での実戦的な訓練を通じて所望の成果を得ることができました。

私は航空総隊の訓練参加部隊指揮官として戦闘機等とともにアイルソン空軍基地に展開し、現地にて指揮を執り、自身もF-15に搭乗し実際に現地の訓練状況を視察しました。訓練空域から眼下に広がる景色には、日本国内の訓練時に見慣れた海と波は一切なく、果てしなく広がるアラスカの広大な陸地に、これまたどこまで続いているのかわからないほど長く蛇行した河川が這い回っており、そこに時を追うごとに自機、僚機などが描くコントロールの影が増えていくのを見て、我々は遠く日本を離れた地で訓練に参加しているのだと実感しました。このように通常の国内訓練よりも規模を拡大した実戦的な訓練環境の下で、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、対戦闘機戦闘訓練、空中給油訓練等に参加し、米軍とのインターオペラビリティを向上させたことに加え、地上においても米国をはじめとする参加各国との防衛協力・交流を推進することで我が国周辺を含む地域の平和と安定の確保（＝「自由で開かれたインド太平洋」の実現）

に何らかの寄与を果たせたのではないかと感じています。

ちょうど夏至の時期、北緯65度近いアイルソン基地近傍では日照時間が22時間近くになるなど、「白夜」に近い環境で生活を送ることになり、訓練中盤を過ぎると隊員の中には「そろそろ夜が恋しくなってきました。」と漏らす者も出てきましたが、長年の訓練参加によって蓄積された教訓が活かされた結果、隊員の生活環境はすこぶる良好であり、しっかりと「オフ」の時間を充実させることで、「オン」の状態である訓練を実のあるものにすることができました。北米最高峰のデナリを見に行く者、アラスカ鉄道に乗る者、サーモンフィッシングにトライする者、いつもと変わらず駆け足に汗を流す者、多種多様なアラスカのクラフトビールを楽しむ者等々、それぞれに楽しみを見つけ、仲間とともに充実したオフを過ごすことで、普段は別の職場にいる訓練参加者同士が連帯感を日々強化し、オンのタイミングでそれぞれのプロフェッショナルが組織的に力を発揮したこともまた、本訓練が無事故で成功裏に終了したことにくらか働いたものだと感じています。臨時に編成された部隊での国外訓練では、こういった面で組織的な能力向上に繋がることも有意義な点の一つでしょう。

そして、多くの参加者が、外国軍人との現地での交流を通じてさらに充実したコミュニケーションを図るべく「もっとしっかりと英語を勉強しよう」という意識を持つことができたのも、一つの成果なのですが、こういったきっかけから、将来的にはJAAGAの表彰式に呼ばれるような准曹士隊員が育てられたら嬉しく思いますので、今後も様々な分野で空自部隊との交流のほど、よろしく願います。



米空軍演習（RFA25-2）参加所感

航空支援集団参加部隊指揮官 第1輸送航空隊 飛行群司令 1等空佐 中島 和寛

令和7年6月12日（木）～28日（土）の間、アメリカ合衆国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレメンドルフ・リチャードソン統合基地（Joint Base Elmendorf - Reichardson: 以下「JBER」という。）並びに周辺空域で実施された米空軍演習 RED FLAG ALASKA 25-2（以下「RFA25-2」という。）への参加概要及び所感について皆様にお伝えしたいと思います。

今回の演習は、第9航空団のF-15J/DJ×6機がフェアバンクス郊外のアイルソン空軍基地、警戒航空団のE-767×1機及び第1輸送航空隊のC-130H×2機がアンカレッジ郊外のJBERに展開しました（空自参加人員：約270名）。

JBERは、2010年、米陸軍フォート・リチャードソンと米空軍エレメンドルフ空軍基地が統合されて発足した基地であり、約340km²（東京23区の約半分、横田基地の約50倍）の広さがあります。また、基地内には国立墓地があり、その中にはアラスカ在住の日本人有志により建立されたアッツ島日本人戦没者慰霊碑もあります。我々も演習の開始に先立ち、御霊に対して深い敬意と哀悼の意を込めて参拝いたしました。



アッツ島戦没者慰霊式
(フォート・リチャードソン国立墓地)

また、JBER内、特にエレメンドルフ側とフォート・リチャードソン側を結ぶ幹線道路の両側には広大な森林が広がり、グリズリー、ヘラジカなどの野生生物が多数出没します。JBERの基地業務を担当する第673航空団司令のマブット大佐は、「我々は害獣として野生生物を駆除するだけでなく、麻酔で眠らせておいて個体管理をするなど、JBER“ナショナルパーク”のパーク・レンジャーとしての役割を果たしています。」と話されていました（マブット大佐の執務室にはグリズリー、ヘラジカ等の多数の剥製が飾られていました）。



左：警戒航空団 第602飛行隊長 平山2佐
中央：第673航空団司令 マブット大佐 右：筆者

RFA25-2で使用する訓練空域はアイルソン空軍基地東方に所在し、縦500NM×横200NM、日本国内で比較すると関東～東北～北海道をカバーするほどの大きさがあり、国内では実施困難な大規模な各種訓練を実施することができます。一方、訓練空域は複数の空域に区分され、それぞれ高度制限が定められているほか、地上への騒音被害を防止するための高度制限が多数設定されており、複雑な空域となっています。また、アラスカには湖沼に面した住居から離発着する水上機が多数存在し、特に低高度における異常接近の防止に留意しなければならない特性を有しています。

飛行訓練では、戦闘機等との連携要領について演練したほか、各種脅威を回避しつつ、設定された物料投下場への各種貨物の空中投下を実施しました。また、空中投下に先立ち、米軍との共同点検を実施する等、相互運用能力を向上させることができました。また、JBER内には砂利敷きの不整地離着陸場が設定されており、国内における不整地離着陸訓練とは異なる経験を積むことができました。さらに、訓練の合間を活用して各職域間の日米部隊間交流を実施することにより、相互理解を深めることができました。

RFA25-2では、広大な訓練空域を活用した戦闘機等との多数機訓練、物料投下訓練及び不整地離着陸訓練を集中的に実施することにより、任務遂行能力を大きく向上させることができました。また、国外の米軍基地への展開、訓練及び撤収を通じて、米軍との調整能力を向上させるとともに、各職域間の部隊間交流を通

じて相互理解を深めることができました。現在、RFA には C-130H に加えて C-2 も参加しており、毎年、1 輸空隊が参加することはできませんが、今回の演習参



不整地離着陸場への着陸（接地）

加で得た教訓を活かして、引き続き精強な部隊を育成していききたいと思います。



日米隊員間の交流

コープ・ノース25参加所見

第3航空団 飛行群司令 1等空佐 大久保 雄史

1 全般

航空自衛隊は、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に資するべく、日米豪共同訓練（コープ・ノース25）を実施した。

2 訓練期間及び場所

令和7年2月3日（月）～同年2月21日（金）
（展開撤収を含めた期間：令和7年1月21日（火）～同年3月2日（日））

アメリカ合衆国グアム島及び同周辺空域

3 主要参加部隊等

- (1) 日本：F-35A × 6機、E-2D × 2機、KC-46A × 1機
- (2) 豪州：F-35A × 8機、E-7 × 1機、KC-30 × 1機
- (3) 米 国：F-35A、F-35B、F-16、F-18E/F/G、KC-135、KC-46、E-3、E-11 等多数

4 細部

(1) 訓練準備等

準備段階では、6月のIPCに始まり、11月のFPCまで日米豪での調整を繰り返し実施してきた。特に今回が海外における初めてのF-35Aの共同訓練ということもあり、保全関係の調整に困難を要した。この調整と並行して、航空機の可動率の向上、隊員の士気高揚に努力した。中でも JAAGA からの激励等、自衛隊内外の様々な方々のご協力ご支援を得て、隊員一同の一層の士気高揚を図ることができ、準備が万全なものとなった。

(2) 訓練環境等

訓練環境としては、広大な訓練空域と電子戦等に制約の少ない環境により、日本国内では実施困難な訓練

を十分に実施することができた。また、グアムにおいて2月は乾季にあたり、飛行場及び訓練空域含めて天候による訓練中止等もなく、期間を通じて計画どおり訓練を実施することができた。

(3) 訓練内容等

F-35A、E-2D、KC-46A 全てが、初の国外における共同訓練参加であった。特に、今回のコープ・ノース25は、



3か国のF-35が一堂に会する初めての共同訓練であり、部隊の戦術技量、日米共同対処能力及び日米豪の相互運用性の向上が図られた。昨年までとの大きな違いは、第5世代戦闘機のステルス性能や多種多様なセンサー情報を融合する特徴を最大限活用した第5世代機同士の連携戦闘、第4世代機との連携戦闘及び第5世代戦闘機と同等の性能を有する戦闘機と対峙した際の対処要領を演練する好機となった。訓練後の教訓導出においては、客観的かつ正確な評価分析が実施され、効果的な訓練となっ

た。また、空自KC-46Aが日本の戦闘機以外の国の戦闘機(豪州F-35A)に初めて空中給油したことも特筆される。

さらに、その他の訓練との比較として「レッド・フラッグ・アラスカ」は陸地上空での戦略的環境を模擬した米空軍主催の訓練に多数の参加国の一国として参加するものの、「コープ・ノース」は、比較的制約の少ない環境において、日米豪が計画立案から実行までのプロセスを共有することから、航空自衛隊のニーズをより反映した訓練を行うことができた。

シルバー・フラッグ訓練参加所感

シルバー・フラッグ訓練部隊指揮官 中部航空施設隊 第2作業隊長 3等空佐 木村 祐一

JAAGA会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のことと存じます。

シルバー・フラッグ訓練(以下「本訓練」という。)への参加に当たり皆様から頂戴いたしましたご厚志に深く感謝申し上げます。

本訓練は、「自由で開かれたインド太平洋(FOIP)」の実現に向けた国際的取組の一環として、米空軍主導の下に実施される多国間共同訓練の一つであり、航空自衛隊(以下「空自」という。)を含む諸外国空軍種が一堂に会し、施設分野に関する戦術的及び実務的訓練を通じて、相互運用性及び連携強化を図るために実施されるものです。

令和7年度の本訓練は、空自が23名(うち、女性自衛官3名)、韓国空軍、オーストラリア空軍、シンガポール空軍等の他国空軍9か国48名の計71名が参加(米空軍を除く。)しました。

今年度は、従来とは異なる訓練形式で「レディネスチャレンジ」及び「不発弾処理」に係る訓練が実施されました。このレディネスチャレンジとは、部隊の即応性及び実任務遂行能力を総合的に検証・評価することを目的とした競技形式の訓練です。本訓練では、階級、職種及び国籍問わず、参加全隊員(6チームで編成)を対象とし、基盤造成(可搬型組み立て式テント構築)から被害復旧(被害調査、弾痕復旧、復旧用マット構築等)までの一連の活動を演練し、その訓練成果を競技会で評価する形式で訓練が行われました。

訓練期間中、他国空軍との積極的な交流を通じて、相互理解及び信頼関係の一層の醸成を図ることができました。また、他国空軍における訓練体系や被害復旧に関する取組状況などについて理解する貴重な機会となりました。

訓練参加者から、「大いに刺激を受けた」「新たな知見を得ることができた」という声が寄せられ、本訓練は極めて有意義なものでした。

今回で9回目の参加となる本訓練の主要成果は、次の4点です。①施設部隊の戦術技量の向上(展開先飛行場における運用基盤の造成や滑走路等被害復旧)②米空軍との相互運用性の向上(米空軍保有器材の運用訓練)③参加国との相互理解の深化④空自施設部隊のプレゼンス発揮

特に、空自隊員の「施設及び不発弾処理に関する卓越した知識及び技能」、「自主性と積極性に富む行動と周囲を牽引する

的確な指導力(リーダーシップ)」に関して、米空軍のみならず、他国空軍から高い評価と賞賛の声を受けました。これは、空自における日頃からの練成訓練の成果が十分に発揮され、その充実が証明されたものと認識しています。また、本訓練期間中に活躍した優秀隊員として、第9航空団整備



補給群装備隊の奥苑1曹が表彰され、空自の国際的プレゼンスを示すことができたと思います。

現下、日米同盟の抑止力、対処力の一層の強化が求められている状況において、施設職域においても、本訓練をはじめ、日米施設部隊共同訓練等を通じて、引き続き、運用基盤の造成、被害復旧能力の更なる向上並びに米空軍との相互運用性の強化に資する取り組みを推進することが肝要であると考えます。

最後に、本訓練で得た成果、教訓を活かし、各部隊において任務に邁進するとともに、練成訓練を精到にし、部隊の更なる精強化に尽力していく所存です。末筆ではございますが、JAAGA 会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、お礼の挨拶とさせていただきます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。



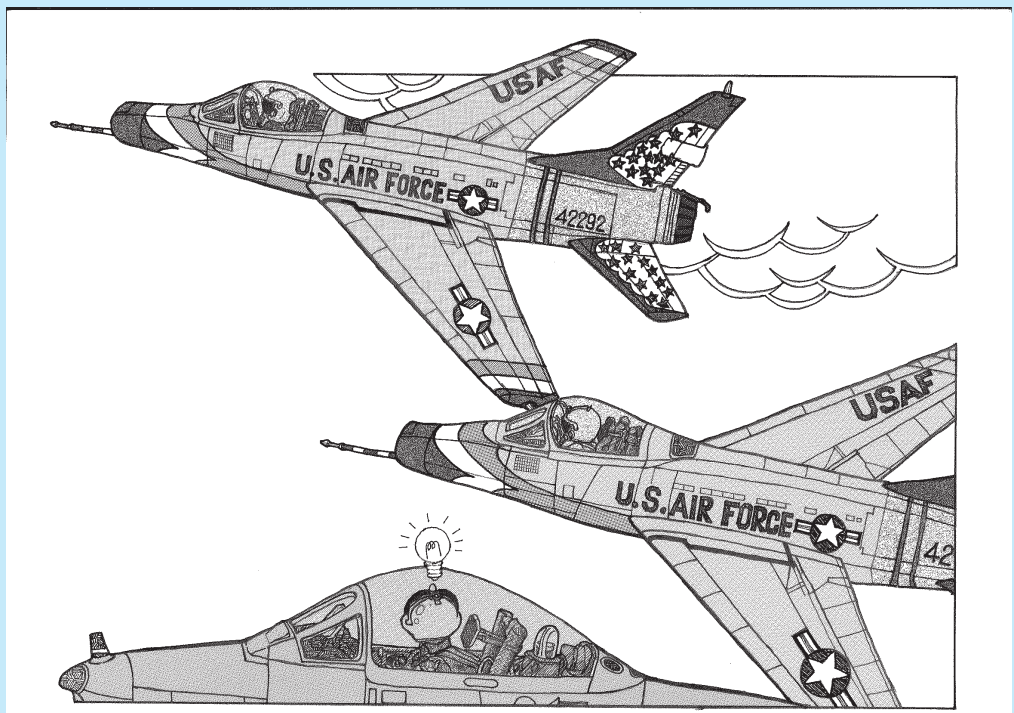
「防空の助っ人 F-100D スーパーセイバー —サンダーバーズ初来日時の裏話—」

F-100D は 1956 年 (昭和 31 年) から板付及び三沢に配備されていました。

サンダーバーズは、1959 年、極東ツアーの一環として初来日しましたが、当時、使用していた F-100C は空中給油能力が無かったため、本国から飛来することができず。板付に配備していた F-100D をサンダーバーズカラーに塗装して使用しました。

1959 年 12 月のジョンソン基地 (現入間基地) のアクロバット展示飛行の際には空自に発足前の「空中機動研究班」のパイロットや整備員も見学を訪れており、パフォーマンスやスモーク発生方法に係わる貴重な情報を得ました。

日本国内に配備されていた F-100D は、防空の助っ人だけではなく、ブルーインパルスへの船出にも大きな貢献をしていたようです。



作：富岡 OB

令和7年度 JAAGA 横田基地研修

JAAGA members' 2025 Visit to Yokota AB on Nov 12



<全般>

清々しい好天に恵まれて「令和7年度 JAAGA 横田基地研修」が実施され、会員 34 名（正会員 3 名、個人賛助会員 13 名、法人賛助会員 11 名、団体賛助会員 3 名、理事 4 名）が参加した。予定外の事象もあったものの、計画の柔軟な運用と各署のご支援をいただいて研修は円滑に進み、研修参加者の防衛意識を高めるという当初の目的は達成できた。

<結団式>

研修参加者は、9時に福生駅ペDESTリアンデッキにて集合であり、北は三沢、小松、南は熊本、沖縄からの参集であって、電車が混雑する時間帯でもあったものの遅刻者は一人も出ず、その「行いの良さ」が好天に反映されたものと確信した。

9時00分、結団式が開始され今瀬理事から永岩団長（正会員）、森谷副団長（個人賛助会員）、木村副団長（法人賛助会員）をはじめ各研修参加者が紹介され、空自将官 OB である岩永団長から「私が現役の時から日米空軍との絆を強くすることに専念してきました。現状をしっかりと見ましよう。」と挨拶された。

バスの出発は、追加入門手続きのために時間を若干早め9時26分となった。9時36分、門前のバス内にて米軍憲兵による入門チェックがあり、研修参加者は皆やや緊張した面持ちで臨んだが、全員が身分証等の準備は万端であっ



ためスムーズにバスは入門できた。

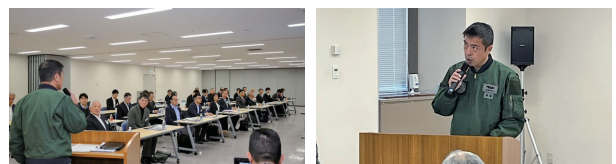
<航空総隊司令部>

9時50分、航空総隊司令部庁舎に到着。

研修団のバスは、庁舎玄関前で航空総隊司令官谷嶋空将、同副司令官亀岡空将、同幕僚長松崎空将補自らお出迎えいただき歓待を受けた。その後、庁舎1階ロビーで横田基地のマスコットキャラクター「はやて君」を伴って研修団の記念撮影を実施した。



10時10分、航空総隊司令部防衛部長上村空将補により航空総隊の概要説明が実施され、我が国周辺の安全保障環境及び航空総隊の任務実施状況等が説明された。また、普段から日米同盟強化のために日米同盟調整メカニズム（ACM）を頻繁に活用して意見交換を実施しており、各種の高官交流を定期的実施して日米指揮官の意思疎通を密に保っているとの説明がなされた。終盤の質疑応答では、各国と連携して衛星監視を含めた情報収集を密に実施していること、航空総隊司令部は不測事態対応のため即時に対応できる態勢をとっていること、陸海自衛隊との基地共用を含めた統合作戦運用によって作戦の坑たん性を高めている等の説明がなされた。



＜航空総隊司令官講話＞

11時から始まった第51代航空総隊司令官谷嶋空将の講話は、我が国周辺の安全保障環境の認識、クイズ形式での近隣国戦力と我が国対比問題、近隣国との懸案事項及び将来の課題等、更に「SDRの遂行（S：Shape 望ましい安全保障環境の形成 D：Deter 抑止（警戒監視、防衛力整備） R：Respond 対処（対領空侵犯措置、災害派遣）」についてスライドを使って細部説明され、多種多彩であり普段認識が及ばないことまで言及され、研修団は国家防衛についての認識をかなり深めたものと思料する。終わりに、「国民としてしっかり安全保障に関して考えることが重要である」と述べられ、「戦争に勝つことよりも仕掛けられないように抑止するということが大切である」と仰ったのが印象的だった。



＜JAAGA 主催日米意見交換会＞

12時から1時間、下士官クラブで「JAAGA 主催日米意見交換会」が実施された。

航空総隊側は、航空総隊司令官谷嶋正仁空将、同副司令官亀岡弘空将、同幕僚長松崎勇樹空将補、同参事官滝川和志氏、同総務部長寺川清司1佐、同防衛部長上村博之空将補、同装備部長松葉佐欣史1佐、同情報課長黒田賢俊1佐、同監理監察官古川義久1佐、同法務官茂籠貴義1佐、同医務官若栗隆志1佐、横田基地司令兼作戦システム運用隊司令細川裕一1佐、第5空軍側は、在日米軍司令官兼第5空軍司令官ステイブン・ジョスト中将 (Lt GEN Stephen E Jost, Commander, US force Japan & Commander, 5th AF)、第5空軍副司令官ジョン・シャティー准将 (Brig GEN John M Schutte, Deputy Commander, 5th AF)、同参謀長ダニエル・ロッシュ大佐 (Col Daniel Roesch, Chief of Staff, 5th AF)、同A1部長エイズリー・ビスカラ少佐 (Maj Ainslie Viscarra, A1 Director, 5th AF)、同A2部長ブラッドリー・ピロロ中佐 (Lt Col Bradley Pirolo, A2 Director, 5th AF)、同A3部長デイビッド・マッキヤロイ大佐 (Col David McAlroy, A3 Director, 5th AF)、同A4副部長パラウィー・エアウァウウィジティアルーン中佐 (Lt Col Parawee Euavijitearoon, A4 Deputy Director, 5th AF)、同A5副部長アンドリュー・メランダー中佐 (Lt Col Andrew Melander, A5 Deputy

Director, 5th AF)、同A6部長クリストファー・ワイリー大佐 (Col Christopher Wiley, A6 Director, 5th AF)、第374空輸航空団司令リチャード・マックエルハニー大佐 (Col Richard F McElhaney, Commander, 374th Airlift Wing) が参加され、研修団も併せると総勢56名と大盛況の昼食会となった。



朝倉理事が司会を務め、最初のスピーチにJAAGA研修団長の永岩正会員を紹介した。

岩永団長は、JAAGA研修団への各種ご支援に対してのお礼を述べた上で、ユーモアを交えながら世界情勢を鑑みればこれまで以上に「変革への勇気と行動への決意」が求められると述べ、日米が力強く自信にあふれた上でお互いが率直に語り合うことが大切で、日米同盟の真の強さは戦略や兵器を共有することだけではなく、お互いの価値観を共有し共に笑い、人と人との友情を共有することが重要だと述べ、最後に「午後の第5空軍の研修が楽しみです」と締めくくった。

続いて、谷嶋空将のスピーチは、日頃からのJAAGAの日米友好への貢献に対する謝意と第5空軍、第374輸送航空団をはじめとする米軍横田基地所在部隊への謝意を述べた後、これまでのJAAGAによる日米同盟強化への貢献によって、今日に至るより強固な絆が育まれてきたが、この絆を基にしたお互いの成長は意義深く、ひいてはこの両国及びこの地域における抑止力になっていると述べた。更にJAAGAが提供してくれるこういった機会を有効に活用して更なる発展に繋がってほしいと述べた。

ジョスト空軍中将はそれらを受けて、JAAGA研修団への歓迎の意とJAAGAの30年にわたる日米同盟強化への貢献に感謝の意を述べた。また、REFORPAC (RESOLUTE FORCE PACIFIC 2025) 等の多国間共同訓練によって日米同盟の強さを示すことができ、BAOCC (Bilateral Air Operations Coordination Center：2国間航空作戦調整センター) の設立によって作戦遂行能力を向上させる重要なマイルストーンとなり、今年は素晴らしい年になっていると述べた。更に、航空自衛隊F-15の米本土・ヨーロッパ展開にも言及され、航空自衛隊の国際舞台での活躍に祝意を示した。終わりに改めてJAAGAの貢献に謝意を述べ、「皆さんの努力は、私達の共有する価値観の強さと共に築いている明るい未来を証明しています」と締めくくった。



＜第5空軍司令部 VIP 表敬＞

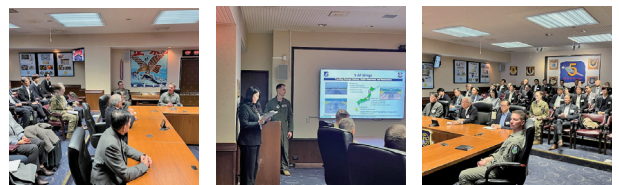
13時10分、第5空軍司令部庁舎に到着。永岩団長、森谷副団長、木村副団長、菊田理事、池田理事がジョン・シャティー第5空軍副司令官を表敬した。20分弱の短時間の懇談であったが、シャティー副司令官は終始にこやかで和やかに話され、永岩団長は自身が現役自衛官の時より日米の絆が強まっていることへの謝意と今後この絆を広報していく旨を述べると、シャティー副司令官は日本との絆はとても重要であり、今後も更に深めていきたいと述べた。最後に和やかに記念写真を撮って表敬が終了した。



＜第5空軍概要説明＞

13時30分、第5空軍会議室において、研修団に対して第5空軍の概要等についてブリーフィングが実施された。

冒頭、シャティー副司令官は、このあとブリーフィングするのは、第5空軍がどういった部隊なのかということ、この1年どういったことを実施してきたのかということ、そして、米軍本部と第5空軍がどう変革してきたのかということであり、重要な日米同盟を今後も強化していく旨を述べた。



ブリーフィング概要は、第5空軍約30,000名は三沢、横田、嘉手納にそれぞれの各機能をもって分散し、それによって地域の戦略的バランスを保ち、圧倒的な存在感を示すことにより安心感をもたらすとの説明があり、在日米軍・第5空軍は地域の安定化を保つために日本側とあらゆるチャンネルをもって密接に絆を強めてきた。最近ではトランプ大統領と高市首相が会談を実施し、その時に高市首相は日本の自衛隊を根本的に強化すると発言し、トランプ大統領はそれを米国は支援すると発言した。第5空軍はこれまで日米の絆を強めることに専念してきたが、今後は実行力を高める支援もしていく。ジョスト司令官は、在日米軍に対し、統合作戦司令部（JJOC：JSDF Joint Operations Command）と連携し、USFJ 2.0との整合性を確保するため、市ヶ谷に調整チームを設置するよう指示された。

これにより、自衛隊と在日米軍は共通のビジョンとコミットメントを確立し、危機や緊急事態への日米の対応能力を強化し、日米防衛態勢の更なる強化に向けた第一歩となった。第5空軍は①人道支援・災害救援・武力紛争対処②日米同盟強化の支援③BAOCCによる自衛隊との緊密な連携を実施していき、日本の自衛隊と密接に行動していくと説明した。

<米軍 C-130 航空機説明>

14時30分、第5空軍駐機地区において、C-130輸送機の研修を実施した。

当該C-130は、大量の人員や物資を迅速に空輸して航空作戦を継続・維持する任務を有しており、約20トンのペイロードを持っている。貨物室に入ると巨大な洞穴に入った感覚となり、その大きさに圧倒された。任務としては時に緊要地に特殊部隊の隊員を落下傘降下させることもあり、物資についても大量に落下傘降下させることもあるとのこと。その能力を使って12月には太平洋地域のアクセス困難な離島に「クリスマスドロップ」と銘打ってチャリティで支援物資を空中から落下傘投下させている。昨年は米国、カナダ、オーストラリア、韓国に加えて日本の航空自衛隊のC-130も参加して、共同でクリスマスドロップを実施したと

ことであった。また、コックピットの研修を実施できたので、研修参加者はコックピットの計器類をバックに思い思いのポーズで記念写真を撮っていた。

<解団式>

15時40分、福生駅ペDESTリアンデッキにて解団式を実施した。

まず、永岩団長は「私が現役の時から人と人との繋がりを重視して日米同盟の絆を強くしてきました。現状は更に強固な繋がりとなっていることに感慨深いです。皆さんが研修によって肌で感じた日米の絆やそれに資する活動を良く理解して、周りの人に広報してください」と述べ、森谷副団長は「大変有意義な研修でした」と大きな謝意を示し、木村副団長は「航空自衛隊と米軍がこんなに仲良くしていることを初めて知りました。周りの人に広報していこうと思っています」と述べた。中身の濃い研修であり参加者にはとても感慨深い研修となったものと思料する。

米軍第5空軍、航空自衛隊航空総隊をはじめ研修をご支援いただいた関係各位に御礼申し上げます。

(池田理事記)



横田基地研修所感



三菱プレジジョン株式会社 小林 顕介さん

今回私は初めて JAAGA の研修に参加させていただきました。私事で恐縮ですが、防衛産業に携わってからまだ半年ということもあり、横田基地研修は何から何まで貴重な経験となりました。このような時期に貴重な経験をさせていただきましたこと、大変ありがたく思います。

航空総隊司令部におけるブリーフィングでは、司令部の方々直々に航空総隊の果たす役割を説明いただきました。我が国の安全保障の現状や昨今緊迫している国際情勢について分かりやすくご教示いただき、未だ知識不足な私にとっては学びの多い時間でした。特に印象的だったのは、谷嶋司令官様による講話です。第一線の実動部隊である航空総隊の長である司令官の語りからは、防衛産業に携わって短い私にも伝わるほどの重責を感じました。日々私たちが安全に生活することができる背景には、24 時間態勢で日本の陸海空の安全を守る自衛官の方々の存在があるということ強く実感いたしました。

米軍第 5 空軍におけるブリーフィングでは、任務や部隊紹介、日米連携の歴史と今後の展望についてご教示いただきました。日米両国が現状の連携体制を築くまでの歩みは非常に興味深く、現在は高官同士での食

事会や部隊レベルでの交流が行われているなど密に連絡を取り合っているということを知ることができました。日米両国の結びつきの強さを学んだ一方、印象的だったのは、課題として挙げられていた人的資源の不足です。日本の自衛隊でも人手不足が問題視されているのと同じく、人的資源というのは組織の基盤であり、国を守る彼らの環境改善は必要不可欠だと感じました。続く米軍機見学の研修では、C-130 を見学させていただきました。軍用機を間近で見せていただくのは今回が初めてであり、現役のパイロット及び整備士の方々による概要説明や、実際にコックピットに乗せていただくなど他では味わうことのできない充実した時間でした。

本研修を受け、微力ながらも日本の防衛に携わる人間として、その一端を担えることへの誇りと責任を改めて感じました。今回の研修で得た知見を活かして、日本の安全保障へ貢献していきたいです。

最後になりましたが、今回の研修の企画・運営をされた JAAGA の皆様、日々の任務で忙しい中研修を受け入れてくださった、航空自衛隊・米軍の関係者の皆様には心より感謝申し上げます。



川崎重工業（株）航空宇宙システムカンパニー 営業本部
空自固定翼機営業部 空自固定翼機営業一課 木村 空楽さん

横田基地研修に参加して

今回、私は初めて JAAGA の研修に参加いたしました。業務上、航空自衛隊の基地へはよく訪れますが、横田基地については日米友好祭でしか足を運んだことがなく、今回の研修は大変貴重な体験となり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。午前中は航空総隊司令部での座学講話を拝聴し、午後は第 5 空軍の概要説明と機体見学を行い、濃密な一日となりました。

航空総隊司令部の防衛部長からは、航空総隊の組織概要や活動内容についてご説明いただき、日々隣国から迫る脅威に対処し、日本の空を守っていることを学びました。さらに航空総隊司令官からは、我が国を取り巻く安全保障環境や、常に変化する国際情勢の中で「国民一人ひと

りが安全保障について考える必要がある」というメッセージをいただきました。防衛産業に携わる者である以前に、日本国民として日々情報を収集し、国際情勢を理解し、なぜこの事業が必要なのか、今後日本で何が求められるのかを考え続けることの重要性を改めて認識しました。

第 5 空軍の方からは、任務や部隊概要、日米共同で行っている活動についてご説明いただきました。普段業務上で接する機会のない第 5 空軍について理解が深まるとともに、部隊レベルまで浸透している日米の強固な連携に驚かされました。日本の安全を確保する上で、日米協力が不可欠であることを再認識いたしました。

その後、米空軍の C-130J を見学させていただきました。弊社岐阜工場では空自向け輸送機 C-130H の定

期整備を実施しておりますが、最新型である C-130J を実際に見学できたことは大変貴重な経験でした。コックピットも拝見し、C-130H と比べて計器類が大幅にデジタル化され、装備の進化を実感しました。さらにパイロットの方からは、コックピット後方に仮眠用ベッドやコーヒーポット、電子レンジが備え付けられていることをご説明いただきました。これらは長時間フライトを想定した装備であり、任務の厳しさを改めて感じました。整備隊長からも、横田基地配備の C-130J は本国へ持ち帰り重整備を行っているなど、整備体制

について丁寧にご説明いただきました。

本研修を通じ、日本の防衛産業に従事する者として、国防の一翼を担うことへの誇りと責任を改めて実感いたしました。今回の貴重な経験を今後の業務に活かして国防により貢献できるよう尽力したいと思います。最後に、日々の任務でご多忙の中、温かく研修を受け入れてくださった航空自衛隊・米空軍の関係者の皆様、並びに今回の研修を企画・運営いただいた JAAGA の皆様に、心より御礼申し上げます。

米空軍士官学校留学生支援「日光研修」

JAAGA supports USAF Cadets "Nikko Tour" in Dec

JAAGA 副会長 荒木 (淳)

1 はじめに

防大留学米空軍士官候補生支援事業を昨年に引き続き、深澤理事と担当した。今年度も米空軍士官学校からは4名の士官候補生(4年生)が1 Semester 留学生として防衛大学校に派遣されてきた。アレックス君(Alexander THUE)、ナム君(Nam NINH)、ジョセフ君(Joseph PHETMIXAY)、ライアン君(Ryan NGUYEN)である。

例年と異なり、ホストファミリーとの顔合わせの案内が無かったので、防大担当者に尋ねたところ、米空軍の予算の関連で日本への派遣が一月ほど遅れたためらしい。夏休み期間を利用したホストファミリーとの交流や語学研修などの準備期間も十分に取れなかったようである。仕方なく、彼ら4名の課業スケジュールを勘案して、30分ほどの時間をセットしていただき、防大本館の一室で顔合わせをすることとなった。短時間での顔合わせであり、お互いの自己紹介と必要事項の連絡・確認だけでほぼ時間一杯になってしまった。連絡網としてグループラインを設定し最低限の目的は果たせたが、12月までの各週末を彼らがどう過ごすのかを確認できず、日光研修の日程擦り合わせをどうするかが懸案となった。

しかし、その懸案も思いがけない出来事で解決することとなった。10月31日(金)、ハロウィーンの夜八時過ぎに、3名の候補生から11月3日まで連休となる週末を我が家で過ごせないかという問い合わせが来た。顔合わせの時に「もし週末に

泊まるところが無かったら早めに言って貰えば家内と相談する」とは言ったものの、予め何の連絡もなかったので、考えてもいなかった。翌日の朝、一晩中ハロウィーンを満喫し、疲れ切った彼らを最寄り駅でピックアップして我が家に案内した。彼らは夜までひたすら眠り続け、軽く夕食を済ませた後もまた部屋で眠り続け、起きて動き始めたのは次の日の昼頃であった。それでも我が家の周辺を案内したり、食事に行ったり、色々話す十分な時間を持てたことが幸いであった。親戚を訪ねて沖縄にいるライアン君とも彼らが直接LINEで話をしながら、日程の擦り合わせをしてくれたお陰で宇都宮研修の概ねの時期を決めることができた。



Cadets in cosplay at the station

今年度の宇都宮研修の日程調整を難しくしたのは、もう一つの理由があった。研修の日程を土曜・日曜の二日間から金曜・土曜に変えた事である。本事業をお父様である高柳氏から引き継いだ堀川様が、母校の旧海星学園高校(クリスチャンの女子高、現在の星の杜高校の前身)の生徒さん達が参加するプログラムに変えて10年の節目に当たることから、更なる発展・充実を企図して新たな取り組みを考えて頂いていたからである。金曜日に

星の杜高校を訪問し、エスコートしてくれる生徒さん達に限らず、他の多くの生徒たちとも何らかの交流機会を増やしたいということで、例年以上に素晴らしい内容の計画が出来上がった。

11月8日(土)には開校祭で賑わう防大を訪問し、候補生4名と校内を回りながら、宇都宮研修の調整状況などについて情報共有を図ることができた。その際、ビジネスで海外を飛び回る実兄が急遽日本を訪問することとなったジョセフ君が宇都宮研修に参加できなくなることが判明した。ラインでのやり取りではなく直接会って話をすることで十分な意思疎通が図れることを改めて実感した。ジョセフ君は参加できないお詫びを綴った手紙を準備し、研修当日に他の候補生に託してくれていた。

堀川様や星の杜高校関係者のみならず彼をエスコートする予定であった生徒さんはその心遣い到大変感激していた。



with cadets at NDA school festival

2 宇都宮研修

(1) 第1日目(11/28(金)); 二荒山神社、星の杜高校での歓迎・交流行事、夕食会

去年は、1名が風邪をひき前日にドタキャンしたり、研修にTシャツ1枚の薄着で参加することがあったので、今年は何度も健康管理と服装に関して念押しして本番に臨んだ。

昨年同様に留学生と同行理事は東京駅丸の内中央口の外で待ち合わせた。当日、やや早めに現地に到着してみると、丸の内中央口は閉鎖されていたが、時間通りに中央口の外で彼らと会うことができた。しつこく伝えたおかげで、彼らの服装は気候に応じたものであり、ダウン・ジャケットなども準備していた。逆に、研修初日は快晴で風もない



In front of Tokyo Station

陽の当たる場所を歩き続

けると少し汗ばむ位であった。

東京駅から宇都宮駅までの新幹線では候補生3名、同行理事の2名、計5名が前後の列に分散して座った。一昨年のようにシートを回転させ、向かい合った状態で話をすることはなかったが、初めて顔を合わせる深澤理事との会話は当然のように活発であった。



In the Tohoku-Shinkansen to Utsunomiya

宇都宮駅では、堀川様が米国国旗を持って出迎えて下さった。例年はエスコートする生徒さん達も一緒に歓迎のプラカードや日米の国旗などを振って盛大に出迎えてくれていたが、今年は星の杜高校の生徒さん達とは高校でお会いすることとなり、静かなスタートとなった。



その後、宇都宮市内で最も歴史のある二荒山神社に徒歩で向かった。暖かい日の光を浴びつつ、宇都宮名物の餃子が焼ける匂いをかすかに感じながらの道程であった。

途中で、蝮のアルコール漬けやすっぽんの甲羅の干物、更には猿の頭蓋骨などを並べる相当古い?怪しい?漢方薬のお店の中を覗きつつ商店街を進んでいった。



Eastern Medicine Shop in Utunomiya

二荒山神社は、宇都宮市のほぼ中央に位置し、1600年以上の歴史を持つ由緒ある神社である。「ふたあらさん」の名で広く親しまれ、篤く崇められてきた。平安~鎌倉時代にそれぞ



In front of FUTAARAYAMA Shrine

れの国で最も格式の高い神社を「一之宮」と称していたそうだが、二荒神社も「下野国一之宮」と呼ばれ、これが訛って「ウツノミヤ」となったという一説もあるらしい。银杏の葉や紅葉が陽の光に映える景色を楽しみながら、境内を散策しているとちょうど七五三のお参りに訪れていた家族連れに出会った。晴れ着を着て上機嫌の女の子とその様子を愛おしい眼差しで見つめるご両親の姿が本当に微笑ましく、改めて平穏な日々の大切さを感じる情景であった。



With family of
7・5・3 celebration

その後、ランチに向かう道すがら大谷石が外壁に使われているカトリックの教会に立ち寄った。ナム君、ライアン君は共にカトリック教徒であり、日曜の礼拝は留学中も欠かさないとのことである。堀川様もカトリックの高校であった旧海星学園高校時代に当教会を訪れたことがあるそうだ。



Inside of the
Catholic Church



wall of the Church
made by Oya-ishi

ランチ終了後、堀川様が準備されたバスに搭乗し、星の杜高校に向かった。いよいよ今回の宇都宮研修のメイン・イベントであり、ワクワクとドキドキが止まらない様子の候補生たちを見ながら同行理事のテンションもどんどん上がっていった。

バスを降りて高校の正面入り口に向かって歩いていくと、大勢の生徒さんたちと共に教師の方々も手を振りながら我々を出迎えてくださった。いったん校舎に入ったのちも、今回は授業の都合で交流の機会が持てなかった中学生たちが、せめて挨拶だけでもしたいと集まってくれていた。廊下ではあったが候補生たちと挨拶を交わし、高校生との歓迎・交流行事の準備が整うまで控えることと

なった。しかし、どうしても候補生達と話がしたいという一人の女子生徒が先生を引き連れて現れ、短い時間ではあったが候補生たちとの会話を楽しんだ。



Students and teachers of Hoshinomori H.S.
welcome Cadets warmly



Junior high school students talk with Cadets

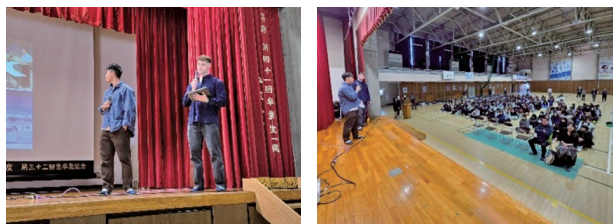
高校生たちが待つ体育館に入ると全高校生が候補生と我々を大きな拍手で出迎え、星の杜高校の生徒自らが企画した歓迎・交流行事が開始された。日本語と英語で会を進行する2名の高校生の司会で、星の杜高校の代表学生による歓迎の言葉、候補生3名の自己紹介の後、全国大会で優勝した実績も持つ箏曲部の生徒が琴の演奏で候補生を歓迎してくれた。琴の生演奏を初めて聞く候補生たちは静かに聞き入っていた。



Welcome play by Koto club

その後、候補生3名がPPTを使って米空軍士官学校の生活や訓練の様子を説明した。英語と日本語を上手く混ぜながら、写真や動画を効果的に使った分かりやすい説明となっており、英語が得意でない高校生達にも理解しやすいプレゼンテーションであったと思われる。何故なら、質疑応答に移った際、数多くの生徒が手を上げ、たどたどしくはあったが英語で質問し、質問が途切れることは無かった。司会が時間の都合で質問を打ち切った後、候補生の一人が「もし質問があれば、この後控室

まで来てください」と述べたところ、10名以上の男女の学生が大挙して控室に集まってきた。このような光景は今まで見たこともなく、星の杜高校の学生たちの知的好奇心の高さと物怖じしない積極的姿勢に驚かされた。



Presentation about life in USAFA by cadets

その後、星の杜高校の説明を担当する高校生がブリーフィングを開始するまで、活発な質疑応答が続けられた。終いには誰が元々学校説明で集まっている生徒か、誰が歓迎行事の後に質問の為に集まった生徒か分からなくなった。結局、翌日に候補生をエスコートする4名の学生も加わり、大勢のグループで各教室の授業風景を見て回るようになった。試験の振り返りを行っていたクラスでは直接教室の中まで入って学生の話聞くことも出来た。幾つかの授業では提携する大学の先生に来ていただき、大学生が受ける内容の講義を受けていた。高校生の学ぶモチベーションを高める取り組みであり、最先端の教育に取り組む星の杜高校の姿勢に驚かされた。



Round Table Q & A session

その後、野点の設えがなされた部屋で茶道部によるお茶の体験が用意されていた。茶道の先生が見守る中、緊張の面持ちではあったがお点前を披露してくれた女生徒の手つきは優雅であった。また茶道部全員でお菓子やお茶を客人である我々にも振舞ってくれ、おもてなしの気持ちを十分に感じることができた。



Tea ceremony at classroom

お茶の体験後、バスの出発時間を待つ間も、ひっきりなしに高校生が部屋や廊下に集まり、候補生たちを取り囲んで離さなかった。笑い声や英語、日本語が入り混じった会話が途切れることは無く、一旦部活の準備で場を離れた学生も練習着に着替えてから再度現れる等、候補生たちとの時間を最後まで楽しんでた。いよいよ離校する際も学校入り口に集まって手を振って見送ってくれた。その様子に候補生たちもいたく感激していた。



Cadets with students

星の杜高校でのイベントを終え宇都宮市内に戻ってホテルにチェックイン、暫く休憩した後、近くのレストランで夕食会となった。堀川様ご夫妻、星の杜高校の香川教頭先生、今回の研修窓口となって頂いたグネ宏美先生、JAAGA 理事2名、そして候補生3名の9名での夕食会であった。カリフォルニア・ロールを米国で流行らせたレストランを日本に逆輸入したお店で、和洋折衷の食事が違和感なく楽しめた。食欲旺盛な候補生たちは3名で一皿のTボーン・ステーキ・プレートや寿司を全て食べた後、更に追加したTボーン・ステーキ・プレート二皿をあっという間に平らげていた。候補生の一人は、立場や専門性の異なる様々な分野の大人と意見交換できた本夕食会を本研修の中で一番意義深いものであったとコメントしている。それほど、夕食会での意見交換は幅広く、活発であり、予定していたお開きの時間を忘れて話が盛り上がった。ホテルに帰り着いた後、2名の候補生は食後の運動を兼ねて夜の宇都宮へ散策に出かけていった。後で聞いた話であるが、香川教頭先生も久しぶりに楽しい時間

を過ごされたようで、高揚した気分のまま3 km以上歩いて帰宅されたそうである。



Dinner with Cadets, Vice principal and a teacher of Hoshinomori High School

(2) 第二日目 (11/30 (土)); 日光東照宮、金谷ホテル (散策とランチ)

爽やかな冬晴れ下、二日目の行程が始まった。前日の星の杜高校における歓迎・交流行事を通じて既に親しくなっていた高校生たちと候補生は、古くからの知り合いのように親しく話しながらバスに乗り込んでいった。バスの中では通路を挟み、候補生とエスコートする学生が同じ列に座り会話を楽しんでいた。日光東照宮に到着するまで会話が途切れることは無かった。

エスコートしてくれる高校生の生徒さん達は、日光東照宮の見どころを予め調べて英語で説明できるように準備してくれていたが、今年はスマホを活用する姿が目についた。中には手書きのノートを持参する生徒もいたが、多くの生徒は予め調べた説明を英語に転換し、スマホにメモとして記憶させておき、それを見ながらも流暢に説明していた。候補生たちも分からない単語をスマホを使いながら日本語、英語を交えて説明するなど、コミュニケーション・ツールとしてスマホを活用している様子に改めて驚かされた。



Cadets and escorting students in Nikko-Toshogu

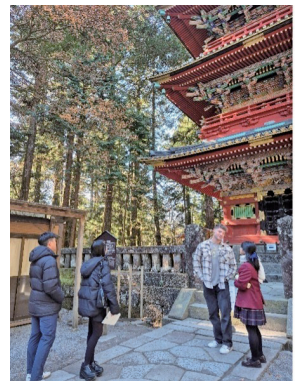
今年エスコートする生徒さんたちは、単なる英会話能力だけではなく、何のためにこの研修に参加したいのか、その意欲や異文化交流をどう将来

に活かしたいかという考えを重点に選抜されたと聞いた。膨大な事前準備の努力のみならず、会話の中においても自分の考えを伝えたいという強い想いが感じられた。例年であれば、研修の後半になるとだんだん慣れてきて、会話に疲れてくると高校生だけで集まって話したりする様子も見られたが、今年はそのような光景は全く見られず、最後まで候補生との時間を楽しんでいた。



Group photo with the "Kara-Mon" of Nikko Toshogu

唯一の男子生徒として参加していたネパール人の高校生も、苦手な寒さに震えながらペアとなった女子生徒とライアン君との会話を楽しんでいた。例年、同行する理事や星の杜高校の先生が会話を促すことも稀にあったが、今年は全く必要が無かつ



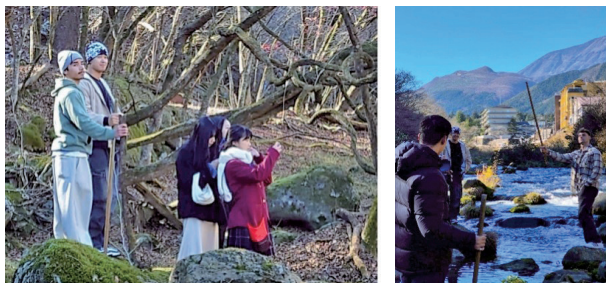
た。候補生の方も前日の星の杜高校の学校説明で、校則の無い高校のポリシーなどに興味津々であり、東照宮の説明だけでなく、星の杜高校に関する質問などで会話が弾んでいた。ある候補生は、星の杜高校の生徒たちの成熟度に驚くと共に将来の夢に対する熱い気持ちに逆に元気を貰ったと話していた。

日光東照宮の研修を終え、昼食会場である金谷ホテルにバスで向かった。日光金谷ホテルは創業明治6年、



Outside of the Kanaya Hotel

現存する最古のリゾートホテルであり、アインシュタインやリンドバーグなども訪れた伝統と格式のあるホテルである。やや早めに到着したので、ホテルの庭園や大谷川までの散策路を皆で歩いた。大谷川にかかる朱色の神橋の上ではたまたま結婚式を終えた夫婦とご家族が写真撮影をしている等、珍しい光景も目にする事ができた。川辺まで降りると兩岸の緑の森や谷先に抜ける青空など、多くの著名な宿泊客が楽しんだであろう素晴らしい風景を十分に堪能する事ができた。



Walking tour around the Daiyagawa

ランチは各自が予めチョイスしたメインディッシュとデザートを堪能させて頂いた。候補生と生徒さん達だけのテーブルでは引き続き会話が弾んでいた。堀川様、星の杜高校のグネ宏美先生、我々理事のテーブルでは、少々気が早い感じでしたが、今年のプログラムの反省と来年の研修のあり方について活発な意見交換ができた。特に今年初めての試みであった金曜日に星の杜高校を訪問して歓迎・交流行事を行う企画は予想以上に良い手ごたえだったことを確認できた。星の杜高校にとって時期的には概ね11月の中旬から下旬までが適当であることも確認できた。勿論、次年度の候補生た

ちを受け入れた上で、彼らの予定や金曜日の授業の振り替えの可否など確認する必要はあるものの、本プログラムが候補生や星の杜高校の双方にとって意義深いものであることは間違いない。



Lunch at KANAYA Hotel

今年は、宇都宮駅まで帰る時間を節約するため、日光に近い東武日光駅から東京スカイツリー駅まで東武鉄道の特急電車での帰路となった。候補生と高校生たちは出発時間ぎりぎりまで名残惜しそうにラインの交換や連絡先の交換を行っていた。同行のグネ宏美先生持参の「トモダチ作戦」のTシャツに候補生からのメッセージを書き込んで、ようやく電車に向かった。

例年と異なり、横須賀まで帰る必要もなく候補生たちは当日夜から翌日の予定も有り、電車に乗り込んだ後はそれぞれの席で寛いでいた。途中、ライアン君から予定していた宿泊先に泊まれないと困った顔で打ち明けられたので、我が家まで案内することにした。ライアン君は拙宅で一泊した後、日曜の朝は礼拝の為に9時頃には我が家を離れていった。残り二名も本研修で最も意義深かった点と来年に向けて改善すべき点について翌日の昼にはラインで回答してくれた。

3 おわりに

日光研修に関わる企画・調整はほぼ全て堀川様を中心となり星の杜高校関係者と共に準備していただいている。候補生や生徒さん達にとって楽しく意義深い研修となるよう細部まで配慮されており、堀川様並びに星の杜高校の関係者の方々に改めて感謝申し上げたい。

また、エスコートしてくれた4名の学生にも深く感謝したい。特に今年エスコートしてくれた生徒たちは、コミュニケーション意欲が高くかつ将来に対する明確なビジョンを持っており、候補生たちも彼らの精神的な成熟度や意欲の高さに大変驚かされていた。

更に今年は、星の杜高校の高校生、中学生、更

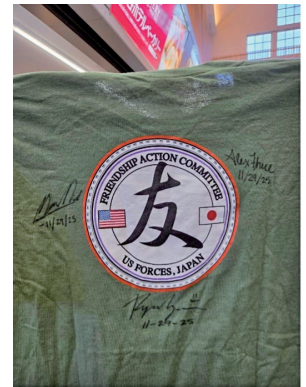
には先生たちにも深く感謝したい。星の杜高校における歓迎・交流事業は候補生にとっても最も意義深く印象に残るものであった。例年は日光東照宮の研修が一番印象に残ったという意見が多かったが、今年は断トツで星の杜高校での歓迎・交流行事を最も有意義な内容であったというのが候補生3名の共通の意見であった。各種のイベントは、高校生が企画・準備して行われたとのことであり、改めて彼らの努力に感謝したい。候補生たちから改善すべき点としてあげられたのは、学校における交流にもっと時間を割くべきという意見であった。来年の研修が更に実り多いものとなるよう堀川様や学校関係者と緊密に連携し準備したいと考える。

最後に、本プログラムを介して、堀川様や星の杜高校との連携を深める取り組みも継続されている。今年の入間基地航空祭には堀川様ご夫妻に加えて星の杜高校から中高生5名と引率の先生3名の計10名をご招待することができた。参加した高校生の一人はパイロットになりたいという夢がより具体的になったと言ひ、今回の星の杜高校での学校説明を担当してくれていた。また宇都宮市内の企業経営者の中で今後自衛隊支援に尽力してくれそうな有力者の方々を堀川様の紹介で百里基地航空祭にご案内することとなっている。両基地

司令のご配慮に感謝すると共に少しでもこの輪を広げられるよう引き続き取り組んでいきたい。

今年の候補生も、任官後に何時かは日本で勤務したいと述べており、日米同盟の礎となる人的ネットワークを強化する草の根活動として些少ではあるが成果を上げつつあるように感じる。星の杜高校にとっても貴重な英語学習や異文化交流の場として定着しつつあり、関係者にとって正に「Win-Win」のプログラムとなっている。改めて高柳様、堀川様、星の杜高校の関係者の皆様、JAAGA 深澤理事に深く感謝申し上げたい。最後に本プログラムを更に充実できるよう JAAGA 関係者の皆様から一層のご理解とご協力を頂けるようお願いしたい。

(荒木副会長記)



See off Cadets at TOBU station

スペシャルオリンピックス支援

JAAGA supports Special Olympics

米軍三沢基地スペシャルオリンピックスが、令和7年11月15日(土)10:00~14:00米軍三沢基地 Weasel Den (子供たちの室内遊技場) 内で競技参加者、家族、関係者約350人が参加し楽しい時間を過ごした。

競技に先立ち、司令官の招待者一同が Weasel Den 2階の特別室に集まり軽食を挟みながら、司令官からの感謝状の贈呈及び記念品、寄付等の交換会が和やかに行われた。

JAAGAからは山本事務局長(支部長は所要により不在)が三沢支部長の代理として出席し、司令官に対し「近隣の日本人アスリートのため」に貴重な週末に基地を挙げて歓迎していただいたこと

への感謝の言葉とともに、本部からの寄付を司令官へ手渡し、司令官からは感謝状を受領した。

10時から開会式が始まり、国旗入場、国家独唱、航空自衛隊三沢基地司令藤田空将補の祝辞、米軍司令官ディヴィッドソン大佐による競技開始宣言で各競技が開始された。

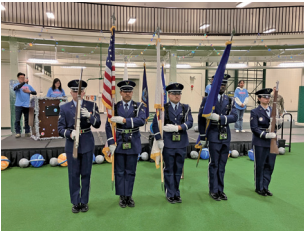
航空自衛隊からは藤田基地司令、3空団准曹士先任佐々木准尉及びその他多くの隊員もボランティアとして参加していた。

米軍都合で、例年より約1カ月遅れての開催となったため、学生の休み期間外となり競技者が例年より少なかったが、暖房が入った室内での大会で、大変良い環境の中、ミニテニス、サッカー、ラ

ダートス（ヒモでつながった2本のボールをラダー目がけて投げ、引っかける競技）などの競技が行

われアスリートたちは一生懸命プレーしていた。

（山本三沢事務局長記）



KPSO チャリティゴルフ “Kanto-Plain Special Olympics” hosted a charity golf event

記録的な猛暑がようやく収まりかけてきた9月24日（水）、多摩ヒルズゴルフコースに於いて、関東プレーンスペシャルオリンピック（KPSO）委員会主催によるチャリティ・ゴルフ大会が開催された。

このチャリティ・ゴルフは、スペシャルオリンピック運営上の資金調達の一環として10年以上前から実施されていたものの、これまでJAAGAへの案内が無かった大会であった。

当日は好天にも恵まれ、大会の趣旨に賛同した日米合わせて98名（日本人：91名、米国人：7名）のゴルフファンが参加して盛大に行われた。今回が初参加となったJAAGAからは4名（賛助会員：蛭名さん、大石さん、菅原さん、川口理事）が参加し、大会の盛り上げに一役かった。また、ボランティアとして中司会員が受付等で大会をサポートされていた。

大会は、アメリカン方式で特に開会式等は行われず、参加者は指定されたそれぞれのスタートホールへ移動し、7時のスタート・ホーンを合図に「ショットガン」方式で開始された。

大会は和やか雰囲気で行進され、各パーティから笑顔がこぼれつつも熱戦が繰り広げられて競技は終了した。

終了後は、レストランで食事を摂りつつ表彰式が実施され、それぞれの表彰者が読み上げられる度に歓声があがり、優勝者等に大きな拍手が寄せられた。競技結果としては、男性優勝者がラスカさん（Mr. Lance Raska）、女性優勝者がウィトマーさん（Ms. Jenna Witmer）で、7名しか参加していなかった米国人が男女とも優勝を飾る結果となった。しかも、男性優勝者のスコアが71、女性優勝者のスコアは69と非常にレベルの高い大会であった。

その中で、JAAGAから参加の大石さんが「女性ニアピン賞」の一つを勝ち取って、一人気を吐いて頂いた。

表彰式では、優勝、ドラコン、ニアピン以外に飛び賞も設けてあり、名前がスコアに関わらず皆が楽しめる仕掛けとなっており、式は大いに盛り上がり、閉会となった。

（川口理事記）



Member of the organizing committee and Mr.Nakatukasa, the volunteer



Participants from JAAGA Mr. Ebina, Ms.Sugawara,Ms.Ohisi and Kawaguti from left



The male winner, Mr. Lance Raska



The female winner, Ms. Jenna Witmer

米空軍将校航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

第1輸送航空隊 中佐
ラッセル・B・スタンフィールド
Lt Col Russell Stanfield



Lt Col Russell Stanfield

はじめまして。ラッセル・スタンフィールドと申します。私は米空軍の中佐で、航空自衛隊の小牧基地に交換幹部として配属されています。私の主な任務は、航空自衛隊C-130Hの教官パイロットです。C-130Hの学生として、初めて小牧基地に配属されたばかりのパイロットに、操縦方法を教育することです。それ以外の時間は、C-130Hの高度な戦術運用に関する飛行訓練の支援や、航空自衛隊との二国間及び多国間イベントへの参加も行っています。



In-flight training



Social event with 401st Education/Training Team

私はテネシー州東部の小さな町で生まれ育ちました。東テネシー州はなだらかな山と美しい湖があり、州都ナッシュビルのカントリーミュージック、メンフィス市のブルースミュージック、そしてもちろんジャック・ダニエル・テネシーウイスキーで有名です。高校卒業までテネシー州に住み、水泳や陸上競技などのスポーツに参加していました。また、小さい頃からキャンプやハイキングなども好きで、日本でもそれを楽しんでいます。

高校卒業後はフロリダ州デイトナビーチの大学に進学し、航空宇宙工学を勉強しました。同時に、米空軍の予備役将校訓練課程にも参加しました。卒業後、アメリカ空軍に入隊し、パイロットに選抜されました。C-130のパイロットを選んだ理由は、人道支援活動、短い舗装されていない滑走路への着陸、山岳地帯での低高度編隊飛行、空中降投下任務など、C-130の多様なミッションに興味があったからです。C-130H及びC-130Jのパイロットとしてのキャリアにおいて、世界中で勤務し、2011年の東日本大震災への支援活動「トモダチ作戦」をはじめとする数々の人道支援活動に参加してきました。今の小牧基地での交換幹部としての勤務は、実は私にとって3度目の日本での勤務となります。それ以前は横田基地に2回勤務しました。キャリアのほぼ半分を日米同盟とインド太平洋地域への空輸任務に注力しました。



401 Airlift Squadron crew
at Tumon, Guam



401 Airlift Squadron, Operation Christmas
Drop 2023

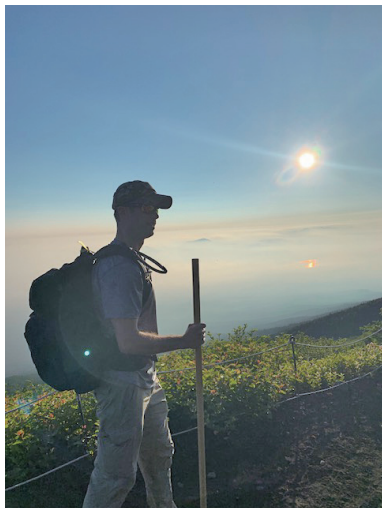
日本での生活、特に現在の交換幹部としての任務を通して、私は日本人の生活や働き方がアメリカ人とは大きく

違って、独特なライフスタイルや文化を体験する機会に恵まれました。この経験を通して、私の文化的な視野が広がり、価値観を見つめ直し、多様な文化や歴史の背景を持つ人々への理解を深めることができました。母国に住んでいた頃は、初めて新しい国を訪れたり、そこで生活したりする人々の困難を完全に理解することが難しい

こともありました。しかし、今、言葉の壁や文化的な誤解といった苦労を直に経験したことで、私は将来同じような状況にある人々の手助けができていると感じています。二人の娘が日本の幼稚園と小学校に通っているため、参観日や運動会に参加する機会にも恵まれ、日本人が教育現場でどのように振る舞うのかを見ることができ、一緒に経験し、学ぶことができました。さらに、交換幹部



Family at 7-5-3 Celebration



Hiking Mt Fuji

として日本の自衛隊の教育環境も見てきました。日米両国の教育制度の長所と短所の両方を見る機会は、私の教育法に対する考え方に大きな影響を与えました。

日本で多くの場所を訪れ、多くのことを経験できたことに感謝しています。夏の祭り、宴会、相撲、そして結婚式や葬式といった人生の節目に至るまで、私の人生の視点は、以前、アメリカに住んでいた時には知らなかった日本の文化への深い敬意とともに、進化を続けています。以前より相互に繋がっている世界において、互いの文化への理解と尊重は重要になっていると思います。

もちろん、この文化への理解に対する最大の問題の一つは、世界中に存在する言語の壁です。私自身も語学学習で、恥ずかしさや誤解といった、非常に気まずい時を経験してきました。失敗への恐怖のせいで、こうした苦労が続き、つらい思いをすることも多いですが、言語の上達に励み続けたり、人間関係を強くすることを諦めないことはとても大切だと思います。振り返って見ると、これまでの数年の経験や人間関係から得られたものはとても大きく、諦めずに語学習得に励んで本当に良かったと感じています。

先ほども申し上げたように、世界は以前よりも相互に繋がっています。国際社会が直面する課題もまた、進化を続けています。日米同盟は長年にわたって強固に維持されており、インド太平洋地域及び世界の安定にとって重要な要素であり続けています。この関係に少しでも貢献できていることを光栄に思います。これからも皆様が経験を共有し、関係を築き、互いに学び合い、明るい未来に向けて共に歩いていくことを願っています。ありがとうございました。



With crew in Okinawa

航空自衛隊コーナー

From Koku-Jieitai

日米豪共同訓練「武士道ガーディアン25」

令和7年9月29日（月）～10月10日（金）の間、三沢基地及び同基地周辺空域において、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に資するため、日米豪共同訓練「武士道ガーディアン25」が実施された。「武士道ガーディアン」は、令和元年に開始された空自と豪空軍の共同訓練であり今回3回目の実施となるが、これまでの日豪に加え、今回は米空軍も参加する枠組みで実施された。

空自からは、三沢基地の第3航空団からF-35A×8機、警戒航空団E-2D×1機及び北部航空警戒管制団が参加し、米空軍からはF-35A×8機、F-16×8機、E-3G×1機、KC-135×2機及び人員約230名が参加、豪空軍からは、F-35A×8機、KC-30A×1機、C-17A

×1機及び人員約160名が参加した。

訓練間、日米豪の保有する最新鋭の「第5世代ステルス戦闘機」F-35A 同士の戦術訓練が実施されるとともに、地上においても各種訓練が実施され、部隊の戦術技量、日米共同対処能力及び日米豪の相互運用性の向上を図った。

9月30日には、航空総隊司令官谷嶋空将、米空軍第35戦闘航空団司令官デイヴィッドソン大佐、豪空軍副本部長レイノルズ空軍少将が三沢基地を訪れ、部隊を視察するとともに合同記者会見を実施した。各指揮官は、F-35Aを用いた日米豪3か国による訓練を日本で初めて実施したことに触れ、日米豪3か国の連携の重要性を確認した。（太田理事記）



写真：航空自衛隊

日比人道支援・災害救援共同訓練 「ドウシン・バヤニハン5-25」

10月7日(火)から10月11日(土)の間、フィリピン共和国において、空自の人道支援・災害救援に係る能力の向上及びフィリピン空軍との連携強化を図るため、日比人道支援・災害救援共同訓練「ドウシン・バヤニハン5-25」が実施された。

空自からは、航空支援集団のK/C-130H×1機及び人員約30名が参加、比空軍からはC-130H×1機、UH-1×1機が参加した。

本訓練では日比両国のC-130型機が、物料投下訓練、共同搭載し下訓練及び暗視眼鏡を用いた離着陸訓練を実施した他、大量傷病者救護訓練や航空医療搬送に係る専門家交流等を実施し、人道

支援・災害救援に係る能力の向上及び日比空軍種間の連携強化を図った。

また、セブ州沖で発生した地震への対応として、訓練参加中の空自K/C-130Hがレイテ島タクロバン空軍基地からセブ州マクタン空軍基地（マクタン・セブ国際空港）まで、フィリピン側が用意した支援物資の輸送を実施した。

なお、本訓練及び支援物資の輸送には、日比円滑化協定（RAA：Reciprocal Access Agreement）が初めて適用された。

（太田理事記）



写真：航空自衛隊



写真：航空自衛隊

米空軍コーナー *From 5th Air Force*

Bushido Guardian 25: Trilateral exercise kicks off in the Pacific

<https://www.misawa.af.mil/News/Article-Display/Article/4317938/bushido-guardian-25-trilateral-exercise-kicks-off-in-the-pacific/>

三沢基地 — 2025年9月29日、米空軍、航空自衛隊及び豪空軍は初めてとなる三か国共同訓練「武士道ガーディアン25」を三沢基地にて開始した。

本訓練は航空自衛隊主導の三か国共同訓練であり、米空軍、豪空軍及び航空自衛隊間の相互運用性を高めるためのもの。武士道ガーディアンはこれまで航空自衛隊と豪空軍の二か国間での共同訓練であったが、今回初めて米空軍を交えた三か国での訓練に拡大された。

「武士道ガーディアン2025は、ここ三沢基地で豪空軍及び航空自衛隊とともに訓練を行う重要な機会である」と米空軍第35戦闘航空団司令のデイ

ビッドソン大佐 (Col Paul Davidson, 35th Fighter Wing commander) は語る。「この三か国共同訓練は単なる飛行ではなく、より強い絆を築き、専門知識を共有し、共同戦術の練度を向上するものである。ともに訓練することにより、我々は相互運用性を強化し、力を合わせてのレディネスを向上させ、そして開かれたインド太平洋地域での揺るぎなきコミットメントを示すことができる」。

今年の武士道ガーディアンは、第5世代戦闘機の実力の融合に焦点を当てており、搭乗員、整備員、そして支援要員が、複雑なマルチ・ドメイン環境下においてシームレスに連携して運用できるようにする訓練である。参加要員は、現実的な戦闘訓

練シナリオで最新技術を活用することで、インド太平洋における米太平洋空軍の目標を推進し、同盟国やパートナー国とともにあらゆる課題にも迅速に対応できるようになる。

約 350 名の米空軍要員が 300 名の航空自衛隊

員及び 100 名の豪空軍人とともに BG25 で訓練を行う。9 月 29 日から 10 月 10 日にかけて、米国、豪国及び日本から約 25 機の航空機が参加して 25 のミッションを行う。

(菅原理事仮約)



A formation flight consisting of a Royal Australian Air Force KC-30, U.S. Air Force F-35s, RAAF F-35s, and a Japan Air Self-Defense Force F-15

35th FW Celebrates USAF's 78th Birthday

<https://www.misawa.af.mil/News/Article-Display/Article/4312130/35th-fw-celebrates-usafs-78th-birthday/>

三沢基地 — 2025 年 9 月 18 日、第 35 戦闘航空団は三沢基地において米空軍設立 78 周年を祝った。この祝賀会は、平和と世界の安定の確保に尽力した何世代もの米空軍軍人が築いてきた「空における優位性」の遺産を映し出すものである。

祝賀会において、伝統を強調しつつ米空軍の標章を指し示す第 35 戦闘航空団司令官のポール・デイビッドソン大佐 (Col Paul Davidson, 35th Fighter Wing commander)。

本祝賀会は、太平洋における同戦闘航空団の戦闘に焦点を当てた任務を認識するとともに、過去の米空



軍兵の奉仕と犠牲を称えるものである。

(菅原理事仮約)

A New Era: 13th Fighter Squadron's F-16 Divestment

<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/4297537/a-new-era-13th-fighter-squadrons-f-16-divestment/>

2025年9月2日、三沢基地で、第14戦闘飛行隊F-16パイロットのジェイコブ・ウィレンブロック大尉 (Capt Jacob Willenbrock) と第13戦闘機運用整備隊クルーチーフのジョン・ダーキン兵長 (Senior Airman John Durkin) が、同機の三沢での任務解除に伴う移転前の飛行前点検を完了したところ。第13戦闘飛行隊でこれまで使用されてきた航空機は、日米同盟強化のための100億ドルの近代化計画の一環として移転される。F-16に代わりF-35ライトニングIIを導入することにより、三沢基地は攻撃からの解放と機動の自由を得ると同時に、敵の最も強固な



防御目標をリスクに晒すことができる。

(菅原理事仮約)

支部だより (三沢 AFB、横田 AFB)

JAAGA members participate in the events at U.S. Air Force Base in Japan

米軍三沢基地エアフォース・ボール開催

Air Force Ball at Misawa AB Oct 5, 2025

2025年10月5日(日)午後6時より、三沢基地内のミサワクラブにて、第35戦闘航空団司令官のポール・デイビッドソン米空軍大佐 (Col Paul Davidson, 35th Fighter Wing commander) の主催による「米空軍創立記念晩餐会(エアフォース・ボー

ル)」が開催された。今年で78歳を迎える米空軍の誕生日を祝うこの晩餐会には、航空自衛隊から船倉慶太北空司令官をはじめ三沢基地所属の皆様、三沢市からは小松山市長および市関係者が招かれ、日米の絆を象徴する華やかな夜となった。



Commander and Mrs. Davidson,
Mr. and Mrs. Ikezoe and Mr. and Mrs. Yamamoto



Air Force 78th Birthday Cake Cutting Ceremony

JAAGA からは池添支部長と山本事務局長がご夫婦で参加。今年のテーマは“Samurai of the Skies – Honor and Legacy (空のサムライ – 名誉と遺産)”。空を駆ける勇者たちの誇りと歴史を讃える言葉が、会場に静かに響いた。

オープニングセレモニーでは、国旗・軍旗の入場、日米両国歌の独唱、祈り、来賓紹介、戦争捕虜および行方不明者への祈り、そして乾杯が行われ、厳粛な空気の中にも温かな敬意が漂った。

デイヴィッドソン司令官は、空軍の 78 年にわたる偉業を称え、これからも強く誇り高い空軍であり続けることを誓っていた。夕食が始まると、北部航

空音楽隊の演奏が会場を包み、和やかな雰囲気の中で晚餐が進行。ゲストスピーカーとして登壇した米太平洋空軍副司令官ローラ・レンダーマン中將は、スライドを用いて隊員たちの活躍や三沢市との協力関係を紹介し、会場に感動をもたらした。

歓談の間には、空軍創設 78 周年を祝うケーキカットが行われ、最後は北部航空音楽隊による空軍歌の演奏でフォーマルパーティーが締めくくられた。その後のアフターパーティーでは、ダンスや演奏で会場が華やかになり、参加者たちの笑顔が輝いていた。

(池添三沢支部長記)

米軍横田基地エアフォース・ボール開催

Air Force Ball at Yokota AB on Sep 20, 2025

米空軍の創設を祝う横田基地 Air Force Ball が 9 月 20 日 (土) 18 時から横田基地内太陽コミュニティーセンターにおいて米空軍横田基地司令官マックエルハニー大佐 (Col Richard F. McElhane, Commander of Yokota A.B.) 主催で開催され、多数の周辺自治体首長ご夫妻が招待されるとともに、航空自衛隊からは横田基地司令細川裕一 1 佐ご夫妻をはじめ、各部隊指揮官及び准曹士先任が出席されていた。また、JAAGA からは、前原副会長、加藤、村田渉外理事が参加した。

会は、国旗入場、日米国歌斉唱、お祈りの後、ケーキカット、太鼓演奏等、日米の文化が融合したユニークなセレモニーが行われた。美味しい料理や会話とともに、楽しい音楽やダンスなど、米軍人たちは大いに盛り上がり、祝いの宴は夜遅くまで続いた。

(加藤理事記)



JAAGA members with Col McElhane



78th Cutting Cake

「JAAGA30 周年行事ご案内」

Announcement of JAAGA's 30th Anniversary event

来年、JAAGA は創立 30 周年を迎えます。これもひとえに、会員の皆様のお支えによるものであり、感謝申し上げます。2026 年 7 月 14 日 (火)、グラン

ドビル市ヶ谷で記念講演会・祝賀会他を計画しており、会員の皆様のご参加をお待ちしております。詳細は、来年 5 月頃にお知らせ致します。

新入会員紹介

正会員（2名）

氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所
増田 友晴	東京都大田区	野口 英臣	東京都調布市		

個人賛助会員（3名）

紙谷 秀之	東京都立川市	井田 悦子	東京都青梅市	阿部 晶	千葉県千葉市
-------	--------	-------	--------	------	--------

法人賛助会員（2社）

法人名	住所	代表者	法人名	住所	代表者
株式会社アイ・テック	静岡県静岡市	大畑 大輔	BAE Systems Japan 合同会社	東京都港区	Rob Peer (ロブ・ピアー)

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400～2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

【法人会員の皆様】30 社

株式会社 IHI、株式会社アイ・テック、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、株式会社エクシオテック、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、株式会社 SUBARU、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、株式会社東芝、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、BAE Systems Japan 合同会社、藤倉航装株式会社、富士通株式会社、株式会社フジワラ、湧上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド

【団体賛助会員の皆様】2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

【個人賛助会員の皆様】116 名

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お陰様で令和 8 年 7 月で創立 30 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGA だより」も、JAAGA 活動の広報と空白、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様（会員に限らず現役隊員の皆様）からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

【連絡先】（郵便） 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会 広報係

（メール） jaagaKH222@outlook.jp

JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様の投稿を募集しています。投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

JAAGA 広報係



会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 2 名、個人賛助会員 3 名の合計 5 名の入会を得ることができました。
- 令和 7 年 12 月 1 日現在、正会員数 242 名、個人賛助会員数 116 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 30 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛助会員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp



作：山本 OB